

きな特徴だといえます。

Q. 消化器病センターの機能は上手くいっていますか。

村上部長 / 私は今年の1月に、越川先生は4月に赴任しましたが、それ以降、機会あるたびに「消化器病センターをより良くし、さらに充実させるためにはどう取り組んだらよいか」といったことを話し合ってきました。

Q. その結論は。

越川部長 / 結論はそんなに難しいものではないですよ。「患者さんのことを第一義に考える」ということを基軸とすることです。そのためには「互いに意思の疎通を密に行っていこう」ということです。

村上部長 / 自分の診療科だからといってそのことに固執することなく、そうした枠を超えて医療に取り組むということです。

Q. 患者さんサイドに立った質の高い医療を提供し、実現するために互いに協力体制を取っていこうということですね。

越川部長 / **村上部長** / その通りです。医師はこれまでに培ってきた経験や習得した医療知識と、最新で最先端の医療技術を患者さんのためにフルに役立てる——そのことに尽きるのではないのでしょうか。そのことをこの消化器病センターで実現していこうということがコンセプトになっており、こうした考えは2人とも一致しています。

Q. 患者さんにとって消化器病センターの存在はどんなメリットがありますか。

村上部長 / 例えば、消化器系の病気で内科を受診された場合は、すでに消化器病センターでの診療が始まっているので、あちこち受診したり、その都度検査を受けることなく、1回のオーダーで済みます。また、入院しなければならなくなった場合は、あらかじめ入院の枠を取ることができるので入院のための待ち時間も少なくて済むな

ど数多くのメリットがあります。

越川部長 / カンファレンスや電子カルテを通じて少しでも手術の待ち時間を減らすこともできます。もし、患者さんの中でセカンド・オピニオンを希望された場合は、その希望先の医療機関に情報を提供しています。また、手術がよいのか、それとも術前に化学療法をした方がよいのかななどについても十分なディスカッションをすることができるなど無駄のない、効率の良い医療が行えるなどのメリットがあります。

Q. セカンド・オピニオンを希望される患者さんは多いですか。

越川部長 / 医療に対する関心が高まっていることを反映して結構いますね。それは別にして高度な手術を医療技術力の高い医療機関で受けた方がよいと判断した場合は、当病院から大学病院などに患者さんを紹介したり、医師に当病院に来ていただいて手術をしてもらったりしています。

Q. 他の医療機関に頼んで患者さんの手術をお願いすることは主治医としてのプライドにかかわるのでは。

越川部長 / 無理して手術した後、患者さんに大きなトラブルが起こったり、後遺症で困ったり、悩んだりすることに比べたら医師のプライドはそんなに傷つくことはないと思っています。要は患者さんが健康を取り戻し、元気になっていただくことの方がより重要だということです。

Q. 自分のところの患者さんを他の医療機関の医師に診てもらおうということを嫌がると聞いたことがあります。

村上部長 / 本当に患者さんのことを思っているのであれば医師のプライドについてはそんなに気にすることはないと思います。

越川部長 / 医師に当病院に来ていただいて手術をしていただくことは当消化器病センターのスタッフにとっても高度な手術の技法を習得することができ、レベルアップにつながります。そのことが今後の手術に生かせることに結び付くことになるので、大きなプラスになります。

村上部長 / 患者さんからの信頼もあり、そういった意味からいっても今の消化器病センターはうまく機能していると思っています。

Q. 最後に消化器病センターの今後の取り組みについて話してください。

村上部長 / 入院から退院までの一連の医療行為をクリニカルパスといいます。このクリニカルパスを実現し、充実させて統一の医療を目指したいと思います。これが実現すれば、患者さんの負担は少なく、また、効率が良くて質の高い医療の提供が可能になるからです。

越川部長 / まだまだ改善すべき点が多々あるので、そうした所を着実に改善し、もっと患者さんのことを考え、有機的な消化器病センターになるように取り組んでいきます。

